



🌸 奈良文化財研究所創立 50 周年記念事業

創立 50 周年記念国際講演会

東京都美術館で開催中の『飛鳥・藤原京展』に合わせて、8月17日（土）に「東アジアの古代都城」をテーマにした国際講演会を、東京上野の都美講堂でおこない、盛会裡に終わりました。演者は中国社会科学院考古研究所の劉慶柱所長、安家瑤さん、何歳利さん、韓国からは国立文化財研究所を退官したばかりの趙 由典・前所長、慶州国立文化財研究所の李恩碩さん、それに奈文研の町田所長、金子部長、井上の8名。基調報告、研究報告と、朝から夕方まで目白押しに続いた講演にもかかわらず、最後まで満席の状態、運営をサポートしたクバプロの担当者からも感嘆の声。聴衆は事前に応募して当選した方に限られていましたが、それでも開演時間よりかなり前から入り口には長蛇の列がみられ、一般の関心の高さがうかがわれる光景でした。

夕刻にはゲストの宿舎で懇親会を催しました。文化庁や東文研などからも多くの方々が集い、日本、



李 恩碩さんの講演

中国、韓国の古代都城に思いをはせながらの真夏の夕べのひとつときをともにしました。

(平城宮跡発掘調査部 井上和人)

『飛鳥・藤原京展』

50周年事業の一環として『飛鳥・藤原京展』を開催しています。飛鳥・藤原地域の調査と研究の成果を通観し、激動の7世紀をダイナミックに描き出した展覧会です。国宝・重要文化財を含む約140件の文物を展示しています。

本展は全国4カ所を巡回しますが、その道のりも半ばを過ぎました。秋は宮城県多賀城市の東北歴史博物館（10月11日～12月1日）、冬は三重県四日市市の四日市市立博物館（12月21日～翌年3月9日）へと会場を移します。

大阪歴史博物館では4万人を超え、東京都美術館では約10万人の観客動員数を達成しました。

大阪で来客アンケートを実施したところ興味深いデータが得られました。回答者の住まいは大阪府が50%を占め、兵庫県、奈良県、京都府と続きます。展覧会を知ったのは新聞26%、人に聞いて24%、ポスター22%で、新聞や広告とともにクチコミも大きな効果があるとわかります。インターネットはわずか4%でした。満足度はとてもよい30%、かなりよい45%、合計75%に達し、ほとんどの来場者に好評をいただきました。年齢層は60歳以上が26%と最も多く、10歳代8%、20歳代7%、30歳代と40歳代は6%でした。明日の日本を担う世代は、古代の日本に関心が少ないのかも知れません。

多くの意見も寄せられました。展示品が少ない、多すぎるという相反する意見や、解説をもっと詳しく、もっと平易にという声があります。一方で、よくまとまっている、わかりやすい、という意見も多

数ありました。復元模型やVTRも不評と好評と両方の意見があります。万人が満足できる展示はむずかしいと痛感しました。全体としては好意的な評価が多く、まずまず成功といえるでしょう。本展をみて興味をもち、実際に現地を訪れた方が飛鳥藤原宮跡発掘調査部の展示室にもお見えになっています。

また本展と関連して、大阪・東京会場に出展した金銅製四環壺（明日香村古宮遺跡出土、宮内庁三の丸尚蔵館所蔵）の調査を宮内庁と奈文研が共同で実施しました。このように展覧会とともに新しい研究もおこなわれています。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 石橋茂登）

発掘調査の概要

興福寺中金堂院回廊東南の調査（平城第347次）

興福寺の主要伽藍を対象とした復元整備計画にもとづき、これまで中金堂院の中門（1998年度）、回廊東北部・中金堂前庭部（1999年度）、中金堂（2000・2001年度）の発掘調査をおこなってきました。今回は回廊東南部を発掘しています。調査面積は981㎡、2002年7月1日から調査を開始しました。この調査により回廊の全容が明らかになりました。

東面回廊は全長約65m、中門を含む南面回廊の全長は約84mあります。今回の調査で検出したのは東面回廊南半の桁行8間分、南面回廊東半の桁行6間分です。梁行は東面、南面回廊とも2間で回廊基壇の幅は10.74mです。柱の礎石はほとんど残っていませんでしたが、礎石の抜取穴によって柱の位置を確認できました。回廊は連子窓が中央に通り、その両側に吹き放しの廊下がある複廊の構造であったことがわかります。

東面回廊西側と南面回廊北側では基壇側面を飾る外装と雨落溝を検出しました。凝灰岩製の地覆石とその上にのせる羽目石あまおちみぞの下端部が残っており、全体は壇正積基壇だんしょうづみであったと考えます。雨落溝は川原石あまおちみぞを2列に並べて底石とし、側石を立てています。溝の内庭側には川原石を敷き詰めた幅90cmの石敷がありました。

今回の調査区で東面回廊の最も北の柱間にあたる場所に、内庭側に下りる階段の痕跡を検出しました。階段北側の地覆石があり、雨落溝は階段の出にそって西に張り出しています。この階段の存在によ

ってここに門が開くことを推定できました。階段の幅は約4.1m（奈良時代の尺で14尺）、門の柱間も14尺であったことがわかります。

門は東面回廊の中央より一間南に位置し、これを境に北と南では、桁行の柱間寸法が異なっています。これは最初に門の位置を決めて、門を基準に回廊を北と南に分けて、必要な間数で割り振るという設計順序の結果であろうと考えます。さらに門の中心線を東西に伸ばすと東金堂と西金堂の中心と一致します。東西の金堂は中金堂院より遅れて造営されていますから、この両金堂は門から延びる軸線を基準に設計されたことがわかります。つまり門の位置は回廊を設計する基準であるとともに、周辺の伽藍を設計する際にも基準となっていたと考えられます。

今後は回廊基壇の時期や構造、回廊内側の内庭部分の状況を把握することを中心に、調査を継続します。

（平城宮跡発掘調査部 今井晃樹）



調査区全景（西から）

平城宮第一次大極殿院西楼出土の木簡

西楼の調査で多数の木簡が見つかったことは前号で報告しましたが、その後も現場から持ち帰った木簡を含む土から遺物を洗い出す作業を続けています。持ち帰った土はコンテナに400箱あまりです。

木簡が見つかった穴は、西楼の全部で16基ある掘立柱の柱穴のうち、実に13基に及びます。柱抜き取り穴は深さ3mにも及ぶ巨大なものですが、深さ1mあまりのところ帯状に堆積した木屑層があり、木簡は主にこの層から出土しました。どの穴も抜き取り穴を埋める最終段階で、木簡を含む木屑を集中的に投棄しているようです。ただ、地下水の状況があまりよくなく、木簡は本来もっとたくさんあったと考えられますが、木屑層が腐蝕してしまっている柱穴も多数ありました。

この他、大極殿院南面の築地回廊の造営に先だっ



「此所不得小便」の木簡
(このところ小便するを得ず)

(平城宮跡発掘調査部 渡邊晃宏)

て周辺を整地した土からも、国郡里制（701年～717年）の表記の荷札などの木簡がみつかりました。平城遷都に伴う大極殿院造営段階の史料として注目されます。

現在、木簡の洗い出しとともに鋭意整理・解読を進め、秋の発掘速報展（11月1日（金）～21日（木））で西楼出土木簡を公開・展示できるように準備を進めていますので、ご期待ください。

藤原宮朝堂院の調査（飛鳥藤原第120次）

8月末、5ヶ月間に及んだ調査がようやく終了しました。場所は藤原宮朝堂院地区の一郭です。朝堂東第二堂と呼ばれる建物と東面回廊について検証するのが、今回の調査の主な目的でした。この場所は戦前、日本古文化研究所によって部分的な発掘が行われていますので、建物規模などの大枠はわかっています。そのため「改めて調査をする必要があるのか」という声も聞こえなくはありませんでした。

しかし、やはり発掘はやってみるものです。古文化研究所は発掘成果にもとづいて、東第二堂を桁行15間、梁行4間に復元していました。ところが、今回改めて全面的な発掘をしたところ、実は梁行5間であったことが判明しました。東第二堂は、孫庇が朝庭部分に張り出すという、これまでに例のない特異な構造をもっていたのです。

また東第二堂は基壇をもつ瓦葺き礎石建ちの建物でありながら、床を貼っていた可能性も、今回の調査で新たに浮上してきました。

ともに、これまでの「常識」をくつがえす重要な成果といえます。しかも、これらの点がわかったのは現地説明会の少し前のことでした。なかでも梁行5間という知見は、現地説明会のわずか3日前に得たものです。全く冷や汗ものでした。

7月20日の現地説明会では、猛暑にもかかわらず500名近い人が集まり、熱心に耳を傾けてくれま



現地説明会のような（紙筒を立てて柱位置を表示）

した。調査部一同、心より感謝しております。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)

藤原京右京八条一坊の調査（飛鳥藤原第123次）

橿原市飛驒町において、市営住宅建設の事前調査として2002年7月からおよそ1ヶ月間、約200㎡の発掘調査をおこないました。今回の調査地は藤原京の右京八条一坊西北坪にあたります。この坪は過去の調査によって、整然とした建物配置をもつ藤原宮期の貴族の邸宅であることが判明しています。その建物群の続きを確かめることが調査の目的でした。

調査地の西3分の1は飛鳥川の氾濫により大きく削平を受けていましたが、調査地の中央付近で倉庫と思われる2間×3間で総柱の掘立柱建物を検出しました。この建物は過去の調査でみつかった周辺の建物と位置を揃えており、貴族の邸宅の一部とみなされます。これにより、坪内の計画的な建物配置がより鮮明になりました。

また鎌倉時代の溝や柵のほか、白磁碗と瓦器碗、瓦器皿が重ねて置かれていた土坑もみつかりました。これは地鎮のまつりに伴うものと思われ、中世の土地利用の一端もうかがうことができました。

面積は小さいながらも着実な成果があがり、担当者はホッと胸をなでおろしています。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 前岡孝彰)



藤原京の掘立柱建物（北から）

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第122次）

飛鳥寺の北西に位置する石神遺跡^{いしがみ}は、1981年以來14次におよぶ発掘調査により、斉明朝（655～661）を中心とした饗宴施設と考えられています。今回の調査は石神遺跡の北限とみられる東西溝（2000・2001年度に検出）以北の状況や、藤原京の条坊道路との関係を明らかにすることを目的としています。

調査区はおよそ東西30m、南北20mで7月から調査を開始しました。しかし調査区内での湧水が思いのほか激しいために、遺構を検出するのも困難で悪戦苦闘の日々が続いています。石敷なども顔をのぞかせ始めましたが、今のところその性格は不明です。周囲の排水溝を掘り下げた際に天武朝ころの木簡や削り屑を含む木屑層の堆積を確認しており、今後の調査の進展が楽しみです。調査は10月以降も継続する予定です。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 奥村直紀）

文化財関係研修の実施

発掘技術者一般研修「一般課程」

「一般課程」は6月18日から7月26日までの間、北は青森県から南の熊本県までの18名の参加者を得ておこなわれました。

本研修は遺跡調査における初歩的知識と技術を習得するのが目的です。多くの時間を割いた遺物の実測では、例年に比べて飲み込みが早く、順調に推移しましたが、多数の遺物を実測できた一方で、その製図に予定したよりも時間を要することになったのは計算外のことでした。



教室における遺物実測実習風景

ここでは土器の実測をしていますが、他に石器、木器、金属器、瓦を対象とする時間もあります。研修生にとっては、最もハードな期間です。



飛鳥藤原地方臨地講義のようす

臨地講義では、予め研修生が各遺跡の解説原稿を用意し、それぞれが説明した後に、講師が補うという形式をとりました。原稿を用意することは遺跡理解につながるもので、この方式は今後も踏襲する予定です。

〔講義題目〕◇内は外部講師

考古学の方法（総論）〈上原真人〉、

日本考古学の諸問題（旧石器・縄文）〈佐川正敏〉、

同（弥生・古墳）〈福永伸哉〉、同（歴史時代）、

遺跡調査法、遺跡探査法、遺跡の測量、

遺跡整備の現状、文化財の保存と活用、

古墳の調査法〈和田晴吾〉、大和の古墳臨地講義、

文化財保護法と埋蔵文化財行政、陶磁史概説、

縄文土器の観察〈泉 拓良〉、埴輪の観察、

弥生土器・土師器の観察、土器の観察と実測実習、

石器の製作技術と観察、石器の観察と実測実習、

木器の観察と実測実習、金属器の観察と実測実習、

遺構・遺物の保存科学、環境考古学概説、

古建築概説、法隆寺臨地講義、

飛鳥藤原地域遺跡臨地講義、瓦の観察と実測実習、

写真撮影概説、報告書作成概説、遺物図版割付実習

（埋蔵文化財センター 西村 康）

発掘技術者専門研修「文化財写真課程」

「文化財写真課程」は、8月20日から9月20日の日程でおこなわれました。写真のイロハから始め、外注・内部処理を含めて業務に役立てて頂こうという研修です。

例年、二桁の参加者がいましたが、本年は参加者数が7名と講師陣の総勢よりも少なく、まさに「マンツーマン」、中身の濃い研修となりました。とはいうものの、長期の研修は派遣が難しい場合も多く、考え直す検討が必要です。



遺物撮影実習

実際に出土遺物を使用して大判カメラによる遺物撮影実習をおこなっています。中には初めて大判カメラに触れる研修生もあり、四苦八苦しています。



暗室処理実習

撮影したフィルムは各自現像・焼き付けをおこない、実際に図版レイアウトまでおこないます。

[講義題目] ◇ 内は外部講師

小型カメラの基礎知識〈東 義彦〉、
 大型カメラの基礎知識〈杉浦秀昭〉、
 感材の基礎知識〈村井敏男〉、
 デジタル写真の基礎知識〈川瀬敏雄〉、
 埋蔵文化財写真の基礎知識、報告書と写真図版、
 遺物撮影の基礎知識、暗室処理の基礎知識、
 美術工芸品の撮影〈金井杜男、勝田 徹〉、
 遺跡撮影の実際〈幸明綾子、村井伸也〉、
 遺物撮影ライティングの基礎〈玉内公一〉、
 遺跡遺物撮影・暗室処理実習、暗室・スタジオの設計、
 製版・印刷の基礎知識〈宮内康弘〉、
 写真画像の評価と判定〈井本 昭〉
 (平城宮跡発掘調査部 中村一郎)

渤海国上京竜泉府禁苑跡の調査

遺跡研究室では、古代庭園に関する調査研究を研究の一方の柱としていますが、それに関連して「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」(科学研



上京竜泉府禁苑の池北部の二島(南東から)

究費：代表者高瀬要一)をおこなっています。今年度は、中国黒龍江省寧安市所在の渤海上京竜泉府禁苑跡を調査対象とし、6月下旬、高瀬、小野のほか研究分担者である藤井英二郎さん(千葉大学)、白志星さん(韓国全南大学校)、さらに現地事情に詳しい小嶋芳孝さん(石川県埋蔵文化財センター)などの参加を得て、現地調査に赴きました。

渤海は、7世紀末から10世紀初頭にかけて現在の中国東北地方を中心に成立した国家。日本との交流も、神亀4年(727)を初めとして渤海使の来日34回、日本からの遣渤海使13回という、当時としては頻繁なものでした。渤海国は8世紀代には何度か都を移していますが、9世紀初頭から滅亡に至るまでのあいだ都であったのが上京竜泉府です。上京竜泉府については、戦前、東亜考古学会が現地調査をおこない、成果は『東京城』(1939年)として刊行されています。

私たちの一行は、今回、黒龍江省文物考古研究所などの配慮で、禁苑跡を自由に踏査することを許されました。禁苑は宮殿区の東に位置し、土塁で囲まれた東西約200m、南北約300mの区画。中央やや北よりに南北に長い楕円形の池があり、その北方に禁苑正殿の礎石が残っています。さらに池の北部には、東西二つの築山状の島が並び、それぞれの頂部にも礎石が残っています。これらは、『東京城』所載の図の状況を残しており、60年以上にわたってほとんど手付かずであったことを示していました。そうしたなか、『東京城』所載図にない「発見」となったのが池南部の隅丸方形の低い島の所在です。現地を何度か訪れたことのある小嶋さんもこれまで気付かなかったとのこと。今回は、池底が比較的乾燥していて池の中もなんとか歩ける状態だったのが幸いしたようです。もちろん、黒龍江省側は南の島の存在は認識していて、付設の博物館に展示してあ

る模型にはちゃんと表現されていました。とはいえ、こんなことも『東京城』を読んでいただけではけっしてわからないこと。あらためて現地で実物に接することの重要性を感じた次第です。

(文化遺産研究部 小野健吉)

✿ 研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部 考古第一調査室

飛鳥藤原宮跡発掘調査部には考古第一調査室、考古第二調査室、遺構調査室、史料調査室が置かれています。考古第一調査室は土器等の遺物の調査研究を担当し、考古第二調査室は瓦・金属器・木器等の遺物を扱うと定められています。しかし当調査部は平城宮跡発掘調査部より組織が小さく、発掘調査で出土する多様で膨大な量の遺物の整理には、組織図どおりの分業では不適合な部分があります。そのため、遺物については瓦・土器・木器(瓦と土器以外を扱う)の3つの整理班を編成して作業を進めています。考古第一調査室の対象とされている土器類は、土器整理班を中心に整理・分析・研究をおこなっています。

日常的な作業は、現場から運ばれてくる土器の水洗、分類、破片の接合と復原、実測、データ処理などの基本作業が中心です。現在は主に吉備池廃寺と飛鳥池遺跡の報告書刊行にむけて、整理作業や実測図作成などをおこなっており、いそがしい毎日が続いています。

飛鳥藤原地域は、7世紀の約1世紀のあいだ日本の都でした。この地域から出土する様々な遺物は、律令国家の成立過程を明らかにしていく重要な資料です。土器もそのうちの主要なものの一つで、どんな遺跡でも必ず出てくる普遍的な遺物です。土師器・須恵器を中心として、7世紀にこの地域で使われた土器の様相を明らかにしていくことが研究課題です。土器の編年や作られた産地の問題など、課題はたくさんあります。また宮都で使われていた土器という性格から、全国各地の同時代の土器研究への関わりは大きいと考えられます。7世紀の土器様相の基本的な変遷についてはこれまでも『学報』などで公表してきましたが、今後さらに詳細な研究成果をあげていくよう努力しているところです。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 安田龍太郎)

✿ 平城宮跡第一次大極殿復原工事

第一次大極殿正殿復原工事は、2001年度までに、大極殿基壇基礎造成(1,795㎡)、木材の調達、基壇化粧石材の調達、工事用地の仮設盛土(53,150㎡)、仮囲いおよび進入口の設置、木材保管庫(1,505㎡)・木材加工場(1,505㎡)・加工原寸場(2,005㎡)・一般公開施設(720㎡)などの仮設物の建設等が発注されています。

大極殿基壇は鉄筋コンクリート躯体に凝灰岩切石の貼り付けを行うもので、平城宮跡でも出土している兵庫県高砂市宝殿産の黄色凝灰岩「黄竜山石」^{キタツヤマシ}を使用します。また、基壇基礎に使用するコンクリートは、乾燥収縮低減剤を添加した通称「五百年コンクリート」を使用しています。

2002年度は、大極殿基壇基礎内に免震装置の設置工事および木材調達、柱礎石の据え付けなどが契約されており、近く素屋根建設工事の発注が予定されています。また、9月から、基壇の化粧石材の加工貼り付けが始まりました。

(平城宮跡発掘調査部 渡邊康史)



大極殿基壇の地覆石

✿ 博物館学実習生の受け入れ

一昨年度からおこなっている博物館学実習生の受け入れも3年目をむかえました。今年度は9月2日から6日までの一週間、実習生の受け入れをおこないました。実習生は帝塚山大学から6名、奈良女子大学から2名、京都橘女子大学、東京農業大学、専修大学、徳島文理大学、大阪明浄大学から各1名の計13名と、昨年度の8名に比べるとかなり増加しています。また、学生の専門も文化財だけではなく、日本文化や造園というように多岐にわたっています。



博物館学実習風景

飛鳥資料館が博物館学実習生の受け入れをおこなっているということが、各大学関係者に認知されてきたのでしよう。

実習は、展示の実際（構成から展示まで、展示品の借用）、展示解説の実際、博物館と建築史、博物館展示の新傾向、博物館のIT化、新しい博物館学構築に向けて、と題して講義および演習をおこないました。以下、その一部を紹介します。

「展示品の借用」では、展示品貸し借りの際の作法について当館の展示品を例に講義をおこない、演習として展示品の梱包から開梱までを実際に実習生がおこないました。当館の性格からして、発掘調査で出土した遺物（考古遺物）を取り扱うことが多いのですが、実習生のほとんどが考古学専攻ではないために、はじめて考古遺物を取り扱う実習生も多く見られました。

今年度の博物館学実習が、実習生にとって有益なものとなったことを期待します。

（飛鳥資料館 西山和宏）

飛鳥資料館 秋期特別展示 『A0の記憶－文化財建造物保存図－』

今年度、飛鳥資料館の秋期特別展は、「A0エーゼロの記憶－文化財建造物保存図－」と題して2002年10月8日から12月1日の会期で開催いたします。また、この展覧会に伴って文化遺産研究部建造物研究室長の清水真一による特別講演会「建造物保護の歩みと修理記録等の保存」を10月12日、午後2時から当館講堂にておこないます。

文化財建造物は、建立からの長い年月、所有者の尽力によって保護されてきました。明治30年に古社寺保存法が成立し、国の事業として文化財建造物



群馬県、妙義神社本殿・拝殿・幣殿、側面図

の修理工事がはじまります。こうした修理工事ごとに、綿密な調査がおこなわれ、修理工事報告書とA0版の大きなケント紙に烏口や面相筆からすぐち めんそうふでを用いて墨入れした、保存図と呼ばれる図面が作成されます。修理技術者によって永年保存を目的に作成された保存図は、そのすべてが古建築の正確な記録ということだけにとどまらず、図面作品として美術的な側面さえも伴う、貴重な資料となっています。今回の特展では、ほとんど人目のふれることのない保存図を中心に、明治時代から現在に至るまでの修理工事の歴史をテーマとする展示を企画いたしました。

また、修理の際には、腐朽などによりやむを得ず部材が取り替えられることがありますが、取り外された古材には、時代の特性を示すものや、銘文を残すものも含まれ、建物と同様の価値を有するものもあります。今回、昭和19年の焼失から現在まで大切に保存されてきた法輪寺三重塔の焼損部材を、古建築への理解を深める資料として、展示したいと考えております。

（飛鳥資料館 西山和宏）

佐原 真 元埋蔵文化財センター長逝去

「おはよう佐原です。ちょっと、教えて欲しいのだけど」

佐原コールで知られた佐原真氏が、7月10日朝逝去された。7月20日のお別れ会には、1千人以上の人々が訪れたという。

昭和39年入所の「花の三九組」として、長く研究所に勤務・活躍された佐原氏の業績について、改めて申し上げる必要もないでしょう。考古ボーイとして出発した佐原氏が、縄文時代を手始めにさまざまな分野に領域を広げ、考古学者として大成されことは異論がないところ。その活動の源はご自身の努

力ですが、それとともに誰にでも、気軽に教えるを請うという謙虚さも忘れることはできません。

朝夕を問わない佐原コール。その経験は少なくないでしょう。国立歴史民俗博物館副館長を経て館長職に就いてからも、そして昨春は入院先の病室からでも。

これとともに見過ごしてならないのが、常に新鮮さを失わない知識欲、子供のような豊かな感受性でした。

「すごいね、すごいね。いろんなことが分かってきたんだね。」

未知への新鮮な驚き、貪欲なまでの知識欲は奈文研時代の誰しも目にしたところです。こうした謙虚さと豊かな感受性は、佐原さんの学問を支える両輪だったのでしょ

「稔るほど 頭を垂れる 稲穂かな」

佐原さんのためにある格言のようです。こうした努力が、佐原さんを大考古学者の高みへと誘ったのでしょ

普通ならここでご冥福を祈る、と言うべきでしょう。しかし、佐原さんのこと。新しい世界でもきっと、活躍されるでしょう。佐原コールもまた、復活するのに違いありません。

「ちょっと遠い所なので、なかなか通じないのだけど。今、いいかな・・・」と。

新世界での、今後のご活躍を祈念して。合掌。

(平城宮跡発掘調査部 金子裕之)



1982.12. 埋文忘年会

【お知らせ】

情報公開施設

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所では、以下の施設が情報公開施設となりました（総務省告示第531号）。

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

図書資料室 奈良県奈良市二条町 2-9-1

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

平城宮跡資料館

奈良県奈良市佐紀町

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

飛鳥藤原宮跡発掘調査部資料室

奈良県橿原市木之本町宮の脇 94-1

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

飛鳥資料館

奈良県高市郡明日香村奥山 601

奈良文化財研究所 50周年記念公開シンポジウム

11月9日（土）10：00～ 於：奈良県新公会堂

テーマ『古代建築研究の新たな展開』

申込先およびお問い合わせ先

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1

奈良文化財研究所 建造物研究室

TEL 0742-30-6812 FAX 0742-30-6811

奈良文化財研究所公開講演会

11月16日（土）13：30～ 於：平城宮跡資料館講堂

講演題目 「考古学用語のあれこれ」

講演者 奈良文化財研究所長

町田 章

講演題目 「歴史空間を地理情報で覗く」

講演者 平城宮跡発掘調査部考古第二調査室

金田 明大

講演題目 「巨大建造物は足元が肝心

－平城宮第一次大極殿の基壇－」

講演者 平城宮跡発掘調査部遺構調査室

平澤 麻衣子

(編集後記)

奈文研ニュースは、調査研究の成果を主たる内容とし、写真を入れて分かりやすく解説をしてきました。「No.6」を迎えた本号から、お知らせのコーナーを設け、執筆者名を入れることとしました。今後も体裁を工夫した情報誌としたいと考えています。

編集 「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所

jimu@nabunken.go.jp

http://www.nabunken.jp



古紙配合率100%再生紙を使用しています

